ミツバチ科学 20(3)：113—118
Honeybee Science (1999)

南ウラル（ロシア）の養蜂とプロポリス産業

中尾　千恵子

はるかなるバシコルトスタン共和国

ユーラシア大陸のヨーロッパとアジアの中間からややヨーロッパよりに背骨のようなウラル山脈が南北に走っている．モスクワからバシキールエアラインでウラル山脈をめざして2時間，眼下に国土の大部分が森と草原の国バシコルトスタン共和国（図1）がみえてくる．首都ウファは16世紀にできた古い町で，この国の全人口（460万人）の4分の1がここに住んでいる．

しかし今のところバシコルトスタン共和国は日本からは遠い，はるかな国である．日本人はおろかモスクワに住むロシア人もめったに訪れることのない国を訪ねることになったきっかけはこの地方で採れるハチミツとプロポリスに出合ったことである．

ウラル地方の養蜂は古代から代々受け継がれてきた伝統産業であること．また“バシキールのハチミツはロシアで一番品質が良い”とか“薬草の宝庫のようなところ”ということは度々ロシア人達から聞いていたこと．今年の2月の初め農業省の売店で売られている実際の商品を偶然手にし，製造元—バシコルトスタン共和国ウファ市，株式会社プロポリス—のラベルを確認した時，編集者としての職業意識と個人的好奇心でとりあえずウファ行きのエアチケットを申し込んでいた．

着陸した飛行機の窓から眺めると，どんより

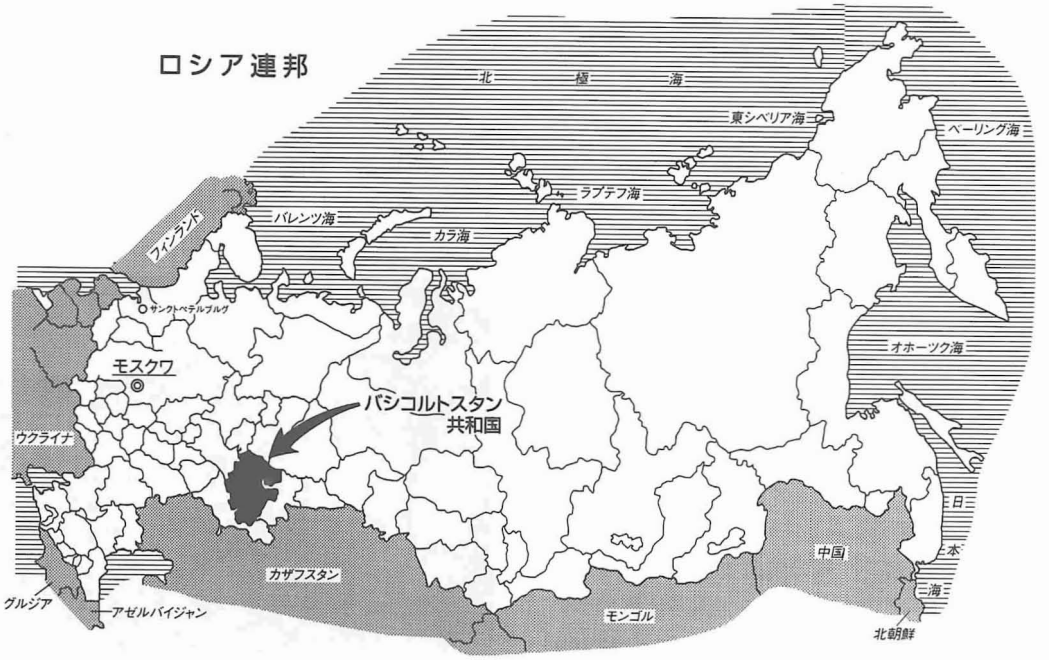

図1　ロシア連邦の中のバシコルトスタン共和国

図2　プロポリス社社長とスタッフ（中央筆者）

した重たい雲でおおわれた空と，雪の平原が果てしなく続いていて黒澤明の映画“デルス・ウザーラ”の世界に来てしまった，というのが正直な感想であった．

バスから降りる気軽さで飛行機から降りると，2階建ての建物があり，タクシーの運転手や出迎えの人がひとかたまりの黒い山になって降りてくる人を見つめている．プロポリス社には到着便名と出迎えを頼んでおいたが，出迎えの人々が各々散ってしまっても誰もそれらしい人は寄ってこない．

普通まったく見知らぬ土地で，出迎え人にも会わないとめげてしまうものであるが，ロシアで仕事をしていると鈍感になるのか寛容になるのか，たいして不安にもならない．冷気を避けて建物の中をブラブラしていると血色のよい中年の男性とロシア人にしてはスマートな中年女性が飛び込んできた．思わず「プロポリス？」と叫んだところ「ダァ，ダァ」と言う返事，何故かお互いに大声で笑い合ってしまった．

これが株式会社プロポリスの社長夫妻との出会いであった．

株式会社プロポリス

「プロポリス研究所」の所長であり，株式会社プロポリスの社長 A．バキーロフ氏（図2）は農業大学を卒業時「蜂の生産物」という論文を書いたが，しばらくは飛行機関係の仕事についていたとのこと，しかし家族や親戚が養蜂事業をしていたため手伝うようになり1991年からは会社組織にし，プロポリスを中心にミツバチ生産物の研究と開発，普及に努めている．

以下はバキーロフ氏へのインタビューの一部である．

「近代医学を過小評価するわけではないが，頭痛，不眠，胃の痛み，喉の炎症，疲労等の場合，いろいろな薬を無分別に飲み併せたり，飲み過ぎたりするとかえって危険である．できれば天然の薬に換えていった方が良い．薬草やハチの生成品は天然原料であり，副作用もない．ロシアの豊かな自然は本来自分の健康は自分で保ち，増強するためにと人類に贈られたものである．

バシコルトスタンは昔から薬草やミツバチの生産物を誇りにしてきた．特にハチミツは古来人間の食物として重要であったが，科学技術の発達により蜂の花粉，唾液，毒，全てが薬としても重要な意味を持ってきたのである．

年々複雑になってゆく自然環境の中で病気の予防や療法として，それらをもっと積極的に導入していく必要がある．

当社は養蜂作業，製造加工作業，病院メンバーとの研究，卸や小売りという企業活動を結びつけ組織的な輪にしている．最新技術と長年の経験から現在はハチミツ，ローヤルゼリー，プロポリス，花粉，蜂ろうの5つの製品分野を持っており，その品目は60以上ある．100%天然で，バシキール独自の成分，味，香りを保ち，いかなる化学添加物，混入物も入っていない．

当面の課題としては，これらの商品がバシコルトスタン共和国のみならず，ロシア全土の住

図3　プロポリス社の直営店

民に供給されること，また店や病院にはベテランの相談員を置くこと，そして最終的には養蜂家の立場を向上させることである.」

株式会社プロポリスは従業員80人，小企業ながら“プロポリス”というA2版の情報紙も毎月発行，市内に2か所ある直営店（図3）ではハチミツやミツバチ生産物商品の他，養蜂用具や設備から蜂に関する書物なども売られている.

平日でもお客が絶えず出入りしている．但し，商品単価は安く，経営的には楽でないようにみえる．日本でも健康と自然志向への関心は高まっているのでサンプルとしていくつかの商品を持ち帰り，知り合いに使用してもらった．なかには評判の良かったものもある.

科学アカデミー養蜂研究所を訪れて

首都ウファから約100 kg東のウラル山脈の麓に国立の養蜂研究所があり，そこではロシア養蜂産業の歴史が分かる展示館も見られると聞いたのは5月に再訪した時である．この際何でも見てやろう的気分で，滞在中の一日を使って直通電話も通じないウラル山脈の麓イグリンスキー地域を訪れてみることにした（図4).

ガソリンを満タンにし，飲み物や食物も積み込んで友人で通訳のナターシャ，プロポリス社の奥さん，運転手，私の4人で朝9時過ぎウファ市を出発，20分程で町を抜けると時速120～130 kmのスピードでひたすら東へ走り続ける.

遠くに白樺やポプラの林が見えるものの，行

図4　イグリンスキー村へ

図5　養蜂研究所

けども行けども空と平地と一本の道だけの単調な風景はロシア人に退屈であっても日本人の目には新鮮で感動的ですらある.

4車線の道はモスクワから極東に至る幹線道路らしく，幅も広く舗装されていて行き交う車の数も思ったより多い.

大型トラックにはさまれるように私達ロシアの乗用車“ジグリ”も懸命に走る．やがて前方に丘のようなウラル山脈がかすかに見えてきた頃，車は突然左折して2車線の田舎道へ入る．胃や腸をひどく振動させながらしばらく走ると人家や働いている人，羊や馬，その廻りで遊んでいる子供達の姿も見られるようになり，どうやらイグリンスキー村に着いたらしい.

バシキール農業大学ミツバチ科の出身で1980年から所長をしているザリーポフ・リナート氏と数名の研究員が出迎えてくれた．研究所（図5）は27か所の養蜂場に4000の巣箱を持っているとのこと．バシコルトスタン共和国全体では国営の巣箱が69,000，私営が125,000箱あり，これらを合わせた年間の生産量はハチミツ2,000 t，蜂ろう800 t，プロポリス2 t，蜂毒は50～60kg，ローヤルゼリーはロシア南部ほど採っていないらしい.

研究所の横手にも小さな養蜂場があり，早速巣箱を覗かせて貰う．生きた蜂を数千匹もまじかに見るのは私もナターシャもはじめてのことで，頭から身体全部を包み込むリネンの上下服“ハチファッション”も気に入ってカメラとビ

図6　ザリーポフ・リナート養蜂研究所長

デオを片手に養蜂場を駆け回って遊んでしまった.

遠方から訪ねてきたお客ということで昼食のテーブルにはご馳走がならべられ，自家製ウオッカやハチミツを添えて気前よく歓待していただいた．研究所は国立とはいえ，いや国立だからこそソ連時代のような国の後楯がなくなって財政的に逼迫しているのではないかとうかがえる.

職員の年齢が高く，若いスタッフを見かけないのもその理由の一つであるが，いくつかの実験室を持つ建物の広さ，時系列的に並べられた展示品や資料の豊富さから，かつては活発にきちんとした研究がなされていたのではないかと推測もできる.

ザリーポフ所長（図6）にバシキール産のハチミツの特徴を伺ってみた.

(a) 単花蜜

採集した植物は単一であって，他の植物のミツが混入していない．そのためハチミツの色は白，ピンク，アメ色と様々である（図7).

(b) ボダイジュが多い

ロシア全土のボダイジュの40%はバシキールにあり，またバシキールの植林面積の20%弱がボダイジュである.

(c) 蜂が強い

夏に集中的に活動するため，元気な蜂が一時期に良いミツを集める（図8).

(d) 天候が適している

シベリアのハチミツは22%以上水分を含んでいるが，バシキールのハチミツは17%以下である.

(e) 高温でもミツの成分を保つ

39℃以上でも成分が変化しない.

(f) プロポリスの効果

冬前にプロポリスを集め，冬季には換気用や外に出るための小孔を残し，プロポリスで巣門を閉じてしまうため汚染されない.

蜂については無知同様，所長の話に質問や確認もできず言われるままにノートにかきとめてきたもので，聞き間違えがあればお許し願いたい．その中でも中央ロシアの蜂の特徴として話してもらった以下は興味深いものであった.

中央ロシアのハチはウラル山脈やコーカサスを越えることができないのでアジアの蜂と明らかに違って，体が大きく，翅が短く，黒っぽい外見が特徴である．野暴性があり，冬季の低温にも耐えられ，群の結束は固い.

特に最近関心がもたれているのは山と森林の多いバシキール南部の野生ミツバチ“ブルジャ

図7　単花蜜

図8　女王蜂の人工授精も行なわれる

図9　巣板は少し大振りなロシア型

図10　研究所横の養蜂場

ンスカヤ”でここは今でも野生養蜂地域である．野生ミツバチ“ブルジャンスカヤ”は落葉樹林の木の中に住んでいて，その巣は地面から5m～15mの間にあり，外に住んでいるため，－40℃～50℃の寒さにも耐え，越冬できる．したがってこの辺りには山林養蜂家もいる．1986年にバシキール行政府はミツバチの生息を守るためこのブレジャンスキー区を自然保護区域に指定した．

昼食をかねた宴会が終わって，もっと大きな養蜂場（図9，10）に案内しましょうと誘われたが，「機会があれば日本の専門家達を案内します．その時は宜しくお願いします」ということで研究所の人達に見送られイグリンスキー村をあとにした．

医学博士 A．F．シィーニヤコフ（プロポリス研究者）

モスクワに戻って現場サイドではなく，蜂やプロポリスについて学問的サイドからの情報にも触れたいと思い，医学博士シィーニヤコフ氏（図11）に連絡をとり，面会を申し込だ．

A．F．シィーニヤコフ教授は1942年生まれ，ニジェノブゴロド医学大学を卒業後，町の診療所で働いたが，両親や祖父母は病気治療にいつも薬草を使っていたので，子供の時から興味を持った．医者になった時，西洋医学の中に天然療法を取り入れて治療するようになったのもそのためである．

25年前モスクワのスポーツ大学生理学部長になってから本格的にローヤルゼリー，プロポリス，花粉，蜂毒などで病人の治療をはじめ，この頃手術してもどうにもならなかったガン患者がプロポリス療法で治っていく体験をしたそうである．

しかしガン予防のためにプロポリスを飲み続けるのは抽出液のアルコールのヤニが溜まってくるので腎臓には良くないと言う見解も持っている．

現在はスポーツ大学心臓研究所の教授で，ロシアプロリス研究所のコンサルタントとして，世界的に有名なルーマニアのアピセラピー研究

図11　A．F．シィーニヤコフ博士

図12　博士の著作

所とは直接の交流はないが，情報を取り寄せたり，彼の記事を送っている．モスクワ郊外リュブナヤにアピセラピーの研究所があり，ミツバチ医学研究者の交流をしていることもわかった．ここでは『プチェロボドストボ』*という雑誌を出している．

*注「プチェロボドスボ」は1921年創刊．年6回（隔月）刊行．総ページ数70ページ，論文数25-35編，出版：カロース社（モスクワ）

第三者としてまた科学者としてバシキール地方のハチミツがなぜ有名なのかたずねてみた．

その理由として彼が挙げたのは①植物（薬草）や樹木の環境，②気候，③汚染のないこと，④伝統産業であること，などである．

以下はシィーニヤコフ博士の著書（図12）．

『花粉をつかった治療体験』『ミツバチは薬やさん』『私はプロポリスで治療する』『薬草セラピーとプロポリスによる抗ガン』『ミツバチの治療例』『回復のヒミツ』

日本との接点を求めて

特に関心があった訳ではないが日本で一般的に「プロポリス」という言葉を聞くようになったのは10年も前ではないと思う．健康志向や自然志向に相まってビジネスとして突然市場化されたような感がある．かといって伝統産業であるロシアおよびウラル地方のミツバチ生産物や薬草と日本の市場を結びつけるのは容易ではない．

このような伝統産業を担っているのはロシアの弱小企業であり，自然の天候に左右される生産体制，パッキングを含めた加工技術や在庫管理システムの未熟さ，輸送や貿易ライセンスの諸手続の実務経験の無いこと，など，資金面，技術面，人材面と問題は山積みしている．

しかし，ウラル地方がエネルギー資源だけではなく，豊かな自然資源の宝庫であることも事実である．加えて教育レベルも高く，基本的インフラは備わっていて，種々の研究所が点在していながらソ連時代外国に閉ざされていただけに今もって“ビジネスの秘境地”になっているのが現状である．

ペンを置くに当たってミツバチ科学の誌上を借り，紹介したプロポリス社や研究機関のパートナーとなり，日本企業のノウハウを導入して次世紀のニュービジネスを，地道に育成して下さることに関心ある企業および研究機関がございましたら，ご連絡頂きますよう呼びかけさせていただく次第です（Tel:02-3280-6531, Fax: 03-3280-6532, E-mail: ig4c-nko@aasahi-net.or.jp）．

最後にロシア・ウラル地方の養蜂産業に就いて紹介する機会を与えて下さいました玉川大学松香光夫教授に心より御礼申し上げます．

（〒108-0074　港区高輪2-1-11-225
（株）マルナカインターナショナル）

CHIEKO NAKAO. Beekeeping and propolis industry in South Ural, Russia. *Honeybee Science* (1999) 20(3): 113-118. Marunaka International, Rm 225, 2-1-11, Takanawa, Minato-ku, Tokyo, 1089-0074 Japan. Tel: +81-3-3280-6531, Fax: +81-3-3280-6532, E-mail: iq4c-nko@asahi-net.or.jp.

Russia's apiculture and research on propolis have been unknown to Japan since around 1991, the collapse of the Soviet Union. I was in Moscow on business early 1999 and came across a kiosk where bee products including propolis were sold, and got interested in apiculture because I saw many plainly dressed Russians came in one after another as apparently regular customers and bought some products in the shop.

As I learned that those products are produced in the Republic of Bashkortostan, which is very famous to Russians for its apiculture, I visited Ufa, the capital city of the republic, located in Southern Ural, with a two-hour flight from Moscow. This writing is a record of personal experiences that gave me an opportunity to get acquainted with native producers and researchers and obtain various information on the industry. I hope it could help to recover exchanges in apiculture information between Russia and Japan. Further information is available on enquiry.